

呼び止められたこともあった。しかし、警邏はエレの顔を覗きこむなり顔を歪めた。

「チッ、そういうことか。あんたならも貧乏くじな仕事だな」
ツバを吐き、魔除けの印を切る。

警邏に、エレはただ下を向くしかなかった。

そんなこともあったが、国内屈指の交易路へ出ると、その先は町にも立ち寄りやすくなった。

旅人などの他所者が珍しくない、大きく賑やかな町であればあるほど、他人への関心は薄い。変わった風体の者に対する免疫もある。

エレは、はじめは極度に怖がっていた。しかし、赤レンガ色のフードをかぶれば顔の痣はさほど目立たず、すれ違ふ人々が無関心を通り過ぎていくのがわかると、落ち着いてやり過ごせるようになっていった。

ことさら雑多な雰囲気の町で宿をとったときのことだった。娼館に出かけていったザックは、すぐに女をひとり連れて戻ってきた。

女は、宿でエレを見るなり、「あら、ホントだったのね」と少しだけ目を見開いた。

「まあ、まかせなよ。ほら、こっち来て」

女はベッドに上がって座りこむとエレに向かって手招きし、持参した布包みを広げた。

「怖がらないでよ、失礼ね。ならそっちの兄さん、見本に

どう？ その傷跡、きれいさっぱり消してあげるよ」

シエルツは首を振り、エレに説明する。

「この女性が、化粧でおまえの顔の痣を目立たないようにしてくれる」

エレは、こわごわと女の隣に座った。女はエレの顎を掴むと、まじまじと顔を見る。

エレにとっては、商売女など初めてだ。大きく胸を開けたひらひらのドレスに、肩のシヨールは赤地に花模様の薄布、そして甘い香水の匂い。

継母よりもきれいだ、とエレは思う。そして、エレの痣に嫌な顔ひとつしないこの人は、いったいどんな人なのか。「そんな情けない顔するんじゃないよ。あんたをいじめてた奴らが、手のひら返して寄ってくるような美人にしてやるからね」

「あのな、はりきりすぎて商売用の派手化粧にすんなよ」
注意するザックに色目を使いながら、女は作業にとりかかる。そう時間もかからずに化粧を終えると、満足げにならずいた。

鏡を向けられたエレは啞然とする。そこに映っていたのは、ふつうの女の子の顔だった。

「ほうら、あんた、かなり可愛いわよ。どう？」

エレは、呆然と鏡を見るばかりだ。女は肩をすくめた。

「ま、しょうがないわね。私も初めて化粧してもらったと